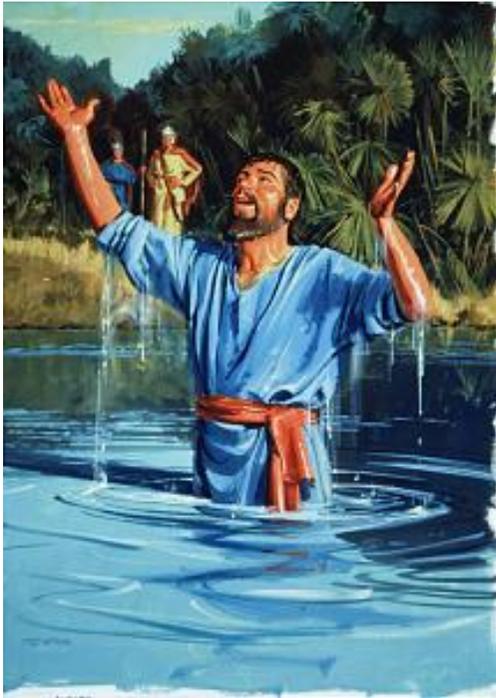


2022年10月23日 説教「ナアマンのいやし」

列王記第二5章8～14節

5章の前段ではアラムのナアマン将軍がツアラアト（重い皮膚病）にかかっていたことを見ました。彼は家で働く召使いの女性からの勧めを受け、イスラエルのエリシャのところに向かいました。アラム王からイスラエル王への依頼状が渡されると、イスラエル王はいいがかりだと怒りました。



1. エリシャに助けを求めて（8～10節）

- ① どうして服を引き裂くのか（8）「神の人エリシャは、イスラエルの王が服を引き裂いたことを聞くと、王のもとに人をやって言った。『あなたはどのようにして服を引き裂いたりなさるのですか。彼を私のところによこしてください。そうすれば、かれはイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。』」これを聞いた、預言者エリシャは王のもとに人をやります。そして、服を引き裂くほどに怒っているヨラム王をなだめて、自分のところにナアマンをよこすようにと頼みました。
- ② エリシャを訪問（9）「こうして、ナアマンは馬と戦車をもって来て、エリシャの家の入口に立った。」イスラエル王はエリシャからのなだめと、依頼の伝言を受けて、ナアマン将軍に預言者エリシャのところに行くようにと促したのでしょうか。ナアマンは、エリシャの住むところまでやって来ました。4章からの繋がりを考えると、エリシャはイスラエルの南ギルガルあたりにいたと考えられます。ナアマンは「馬と戦車をもって」とありますが、5節にもあるように、大変な額のお金や贈り物を携えていました。
- ③ ヨルダン川で身を洗え（10）「エリシャは、彼に使いをやって、言った。『ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになってきよくなります。』」そす。ところが、エリシャはせっかくやって来たナアマンと、直接に面接しようとしません。使いの者になすべきことを告げたのです。それは、近い所にあるヨルダン川に行って、七回あなたの身を洗えというのです。要するに、川に入り、出て、また入る。それを七回行いなさいというのです。そうすれば、元通りにきよくなる、というのです。レビ記13章を読むと、祭司がその人の皮膚を見て、ツアラアトと認めると、その人は汚れていると診断されるのです。今ここで、アラム人ナアマンにその病の認定ときよめ（14章）が適用されようとしているのです。

2. エリシャに会えないナアマン（11～12節）

- ① ナアマンは怒り（11）「しかしナアマンは怒って去り、そして言った。『何ということだ。私は彼がきつと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このツアラアトに冒

された者を直してくれると思っていたのに。』ところが、ナアマン将軍は言われたことを素直に受け取ることができませんでした。大変に怒って、エリシャの家の前から立ち去ったのです。そして言いました。「何ということだ。預言者エリシャは出てきて、直接関わってくれるのではないのか。目の前に立ち、預言者の信じる神、主の名により、患部に手を指し伸ばして、ツァラアトを直してくれるのではないのか！」この訴えはよくわかります。その顔の表情や温かな表情をみながら、いやしのおわざをしてもらうことを期待していたのに、エリシャは顔すら見せないのですから。

- ②他の川でも (12) 『**ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で洗って、私がきよくなれないのだろうか。**』これでは、アラムの国のダマスコ近くを流れる大きく清らかなアマナやパルパルの川に浸かる方が良くはないか。それとも、イスラエルの薄汚れたヨルダン川のほうが勝っているのとも言うのか。こうしたナアマンの叫びも、それなりに同情できるどころです
- ③帰途につくナアマン (12) 「**こうして、彼は怒って帰途についた。**」そんなことから、ナアマンは怒り心頭で、さっさと帰り路を向かい始めたのです。将軍としてのプライドもあったでしょう。

3. ナアマンへの主の関わり (13~14 節)

- ①しもべたちの助言 (13) 「**そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。『わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきっとそれをなされたではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗って、きよくなりなさい。』と言っただけではありませんか。』**」しかし、その時に、ナアマンのしもべたち言ったのです。「わが父よ」というのは、「ご主人さま」といった意味です。「ご主人様、あの預言者がもっと、複雑なことをしろと命じたら、あなたはそれをしたのでしょうか。」とは少し皮肉のようにも聞こえます。でも、ナアマンの心理を読んでいます。川の水浴びのようなことなら、どこでもできるわけで、簡単で権威を感じられないという将軍の心理をついています。そこでしもべ達は間に入りました。預言者エリシャはナアマン将軍を馬鹿したわけではありません。彼を受け入れたらどうでしょう。彼は、川に入って身を洗い、きよくなりなさいと命じただけです。だめで元々です。やってみたらどうなのでしょう、と勧めたのです。
- ②ヨルダン川に (14) 「**そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。**」そうしたしもべたちの、助言を受けて、ナアマンは心を入れ替えました。そして、エリシャに命ぜられた通りに、ヨルダン川の中に身を浸したのです。七回はいやしの時に用いられる回数でした。彼はそれを行いました。

素直に行うことができたのです。恵みというしかありませんでした。

③きよめられ (14) 「**すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。**」七回の水浸しが終わると、ナアマンのからだにあったツァラアト (重い皮膚病) は、消えていました。長年、苦しんできた病気が癒されていたのです。そして、からだは幼子のよう生き生きとして、きれいになりました。レビ記 14 章にあるように、主はアマンのからだをきよめてくださったのです。

《結論》ナアマン将軍はイスラエルのエリシャのところに来るまでは素直でした。

アラム王に頼み込み、自分の重要な財産を持ち出すほどにして、イスラエル

にやって来たのです。ところが、預言者エリシャのところによくたどり着き、

命ぜられたことを聞いて、心を閉ざしてしまいました。エリシャが直接に手を

おき、癒しのわざに取り組んでくれると思っていたのに、会って

くれずに、「ヨルダン川に入って、七回、身を洗いなさい」という伝言だけ。そんなことなら、

アラムの川でもできるのではないかと思いました。ナアマンは怒って帰ろうとし

ました。しかしその時に、何が起きたのかはわかりませんが、彼はヨルダン川

に入り、からだを七回水で洗いました。病気が癒され、きよめられました。

ここで学びたいことは、私たちの心には頑固さが根を張っているということです。自分では柔和な心を持っていると思っている人でも、ちょっとしたことで、頑固な心が表面に現れることがあります。ナアマンはその例でしょう。難しい課題が与えられても、イエスの母マリヤは、「神にとって不可能なことはありません」という御使いの言葉で、「お言葉通りこの身になりますように。」(ルカ 1:38) と従順な信仰を与えられました。聖書には「砕かれる」という独特の表現があります。「神へのいけにえは、砕かれた霊、砕かれた、悔いた心、神よ。あなたは、それをさげすまれません。」(詩篇 51:17) とあります。岩のような固い心は、砕かれてこそ、御言葉への従順な信仰が授けられます。ナアマンも砕かれる必要がありました。また、周りの人々が用いられて、頑な心が変えられている面もあります。兄姉の意見に耳を傾けたいですね。砕かれた心を主が用いてくださる時に、事は動いていくのです。

もう一つ、私たちが学びたいことは、ナアマン将軍が陥った問題です。つまり、彼は癒されるにあたって、自分なりに癒され方を想定していました。預言者エリシャは、やさしい眼差しで、手をもって癒しのわざをしてくれると決めていました。姉ヶ崎キリスト教会の教会誌「ぶどうの樹」3号の巻頭言で私はこんなことを記しました。

「祈りにも私の身勝手はあらわれる。あれこれをしてくださいと祈る私。でも、祈る時、いつのまにか、その答えられかたまで決めている。こういう順序で、このような段取りでと、いつの間にか、答える側に回ってしまっている。意識してそうしているわけではなくても、知らないうちに主権者になっている。……」

主は私たちにすばらしいご計画を持ってくださっている神です。私たちは主ではありません。私たちは神になってはなりません。ここで、エリシャはあえてナアマンの前に直接には出てきていません。ナアマンが主なる神を知ることができるよう、頼るべきは人間ではなく、神であることを学ぶ必要がありました。祈りの答えは主が与えてくださいます。人間ではありません。人間は答えが出される過程に関われません。ナアマンは癒されて、ゆだねることを学んだでしょう。私どもも祈ってゆだねていく信仰をいただきたいものです。

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」(ヘブル 11:6)